

字津保物語新釋

系年  
卷之五

二





うき出ぬさるうらふも甚のことと云て一年をわたりて秋の巻の小  
夏のことより云ゆるあどやうのさむかしくも小同年の如あれど能考  
ぬればやがて次年のことあることひびきののりてあひまどすることと多し  
秋をふるもれる中もこのことひびきありき是は丸をまるあればくることあり  
もと此物語のあどやうあきまきまあるは摺本のしづれもことと多し  
しづれはびいてもるべしことと右富本も得易くも本が異本の考べき  
とありとよく知ぬ山路はまどふらちきりていことひびきも也此巻の  
しも真雄心いとのあひまどいれはびいとせくおぼつちあれどくるものありん  
ありとあひのどめをきくぬればも人のやて考かあびて一の巻はこの  
物語の巻くの序を定めし案よひべきことあれど彼はよ云て八年迄の

うよむ木とさることとあれはまこと此はよらゆ出云ネバことと巻のえがくて  
彼はよ省き此はよいといふまの國讓巻と樓上巻とのるは二年のほど  
をあるしる巻の脱しこととこれいしむひりて作巻のもらきとあふ  
べれど然もいひらきまべし源氏物語中も二年三年もあきしとあれど  
そのあきしと巻をいとよく云わすていことひびきまべしとあれはよき  
心あひのこととま、まえ交何のあきをもいそねバ決く二年のほどのことあり  
し巻のうきとあめ貞雄くくつをまきりこととあふべれはまべしと  
れどま由を云べし大宮のあきまの朝臣廿八巻の十月中の十日は生れ  
あひしと巻のあきまよまおるべきと巻よ廿八日よいでるをまよ大  
宮内百日はあきまよま云るは明年の正月廿八日のことと大宮二巻よ

ありあがり花<sup>クラヒラキ</sup>の下<sup>シモノ</sup>花<sup>マキ</sup>はあつこの朝<sup>アソ</sup>は廿九<sup>イヌミヤ</sup>菜<sup>ニ</sup>菜<sup>ニ</sup>の二月<sup>イヌミヤ</sup>小<sup>イ</sup>て  
こととどらめ<sup>リニユカリノマキ</sup>國<sup>ハ</sup>讓<sup>ハ</sup>花<sup>ハ</sup>の始<sup>ハ</sup>二月<sup>ハ</sup>むうりより云<sup>イ</sup>出<sup>イ</sup>しことあれバ<sup>レ</sup>例<sup>レ</sup>のて<sup>ハ</sup>あ  
あらんよあらんこの朝<sup>ハ</sup>は三十<sup>ミツ</sup>菜<sup>ツ</sup>犬<sup>トシ</sup>犬<sup>トシ</sup>三<sup>サダ</sup>菜<sup>ダ</sup>の年<sup>トシ</sup>と定<sup>サダ</sup>むべきことあれど  
然<sup>サ</sup>あつ更<sup>ズ</sup>あつこの朝<sup>ハ</sup>は廿九<sup>ニ</sup>菜<sup>ニ</sup>犬<sup>ニ</sup>犬<sup>ニ</sup>二<sup>ニ</sup>菜<sup>ニ</sup>の二月<sup>ニ</sup>のことして花<sup>ハ</sup>花<sup>ハ</sup>の下<sup>ハ</sup>  
花<sup>ハ</sup>と同年<sup>オホトシナリ</sup>也<sup>ヨシ</sup>より由<sup>オカノマキ</sup>ハ花<sup>ハ</sup>花<sup>ハ</sup>の中<sup>ハ</sup>也<sup>ハ</sup>あつこの朝<sup>ハ</sup>は利<sup>ナシツボノ</sup>壺<sup>ノ</sup>女<sup>ノ</sup>御<sup>ノ</sup>七月<sup>ノ</sup>むうり  
よりあつこの由<sup>ヨシ</sup>をりひ<sup>オナジ</sup>同<sup>ハ</sup>き下<sup>ハ</sup>花<sup>ハ</sup>はあつこの朝<sup>ハ</sup>は廿八<sup>ハ</sup>菜<sup>ハ</sup>の時<sup>ハ</sup>後<sup>フヂツボノ</sup>壺<sup>ノ</sup>女<sup>ノ</sup>御<sup>ノ</sup>よりあつひ  
ていつきむうりの由<sup>ヨシ</sup>をりひて國<sup>ハ</sup>讓<sup>ハ</sup>花<sup>ハ</sup>は利<sup>ナシツボノ</sup>壺<sup>ノ</sup>女<sup>ノ</sup>御<sup>ノ</sup>をりひてはあつこの由<sup>ヨシ</sup>を云<sup>イ</sup>ひ  
つぎは二月<sup>ハ</sup>六<sup>ハ</sup>日<sup>ハ</sup>のこととせしれば二月<sup>ハ</sup>の始<sup>ハ</sup>は生<sup>ウミ</sup>あつこの朝<sup>ハ</sup>は同<sup>ハ</sup>き中<sup>ハ</sup>花<sup>ハ</sup>は晦<sup>ケ</sup>  
日<sup>ハ</sup>は後<sup>ヒリ</sup>壺<sup>ノ</sup>女<sup>ノ</sup>御<sup>ノ</sup>をりひては生<sup>ウミ</sup>あつこの朝<sup>ハ</sup>は同<sup>ハ</sup>き中<sup>ハ</sup>花<sup>ハ</sup>は晦<sup>ケ</sup>  
小<sup>ハ</sup>て二月<sup>ハ</sup>晦<sup>ハ</sup>日<sup>ハ</sup>あるいとあるこ此<sup>コト</sup>云<sup>イ</sup>る月<sup>ハ</sup>とぞ利<sup>ナシツボノ</sup>壺<sup>ノ</sup>女<sup>ノ</sup>御<sup>ノ</sup>後<sup>フヂツボノ</sup>壺<sup>ノ</sup>女<sup>ノ</sup>御<sup>ノ</sup>の

ともよと生<sup>ウミ</sup>あつこの朝<sup>ハ</sup>は同<sup>ハ</sup>き中<sup>ハ</sup>花<sup>ハ</sup>は晦<sup>ケ</sup>  
て年<sup>トシ</sup>よりぬとわれはこれぞあつこの朝<sup>ハ</sup>は三十<sup>ミツ</sup>菜<sup>ツ</sup>犬<sup>トシ</sup>犬<sup>トシ</sup>三<sup>サダ</sup>菜<sup>ダ</sup>の年<sup>トシ</sup>とす  
き國<sup>ハ</sup>讓<sup>ハ</sup>の下<sup>ハ</sup>花<sup>ハ</sup>は三月<sup>ハ</sup>の上<sup>ハ</sup>十<sup>ハ</sup>日<sup>ハ</sup>むうりよてこととどらめ<sup>タカトノ文ノマキ</sup>樓<sup>ハ</sup>上<sup>ハ</sup>花<sup>ハ</sup>の始<sup>ハ</sup>  
三月<sup>ハ</sup>十<sup>ハ</sup>余<sup>ハ</sup>日<sup>ハ</sup>の始<sup>ハ</sup>とわれはあつこの朝<sup>ハ</sup>は三十<sup>ミツ</sup>菜<sup>ツ</sup>犬<sup>トシ</sup>犬<sup>トシ</sup>三<sup>サダ</sup>菜<sup>ダ</sup>の年<sup>トシ</sup>の三月<sup>ハ</sup>  
のつぎの趣<sup>サマ</sup>あれどあつこの朝<sup>ハ</sup>は三十<sup>ミツ</sup>菜<sup>ツ</sup>犬<sup>トシ</sup>犬<sup>トシ</sup>三<sup>サダ</sup>菜<sup>ダ</sup>の年<sup>トシ</sup>の三月<sup>ハ</sup>のつぎの趣<sup>サマ</sup>あれどあつこの朝<sup>ハ</sup>は三十<sup>ミツ</sup>菜<sup>ツ</sup>犬<sup>トシ</sup>犬<sup>トシ</sup>三<sup>サダ</sup>菜<sup>ダ</sup>の年<sup>トシ</sup>の三月<sup>ハ</sup>  
此<sup>コト</sup>あつと云<sup>イ</sup>るをよりの傳<sup>イサカ</sup>めとせんよ年<sup>トシ</sup>絶<sup>マタ</sup>へ金<sup>カネ</sup>くひるがごとくあれどあつこの朝<sup>ハ</sup>は三十<sup>ミツ</sup>菜<sup>ツ</sup>犬<sup>トシ</sup>犬<sup>トシ</sup>三<sup>サダ</sup>菜<sup>ダ</sup>の年<sup>トシ</sup>の三月<sup>ハ</sup>  
さる由<sup>ヨシ</sup>ありまの樓<sup>ハ</sup>上<sup>ハ</sup>花<sup>ハ</sup>は正月<sup>ハ</sup>三月<sup>ハ</sup>云<sup>イ</sup>と云<sup>イ</sup>はる大<sup>オホ</sup>家<sup>カ</sup>うつせうのヨ<sup>ヨ</sup>ツ  
正月<sup>ハ</sup>あれどこの年<sup>ハ</sup>の八月<sup>ハ</sup>十日<sup>ハ</sup>はあつこの朝<sup>ハ</sup>は利<sup>ナシツボノ</sup>壺<sup>ノ</sup>女<sup>ノ</sup>御<sup>ノ</sup>の家<sup>ハ</sup>は嗟<sup>サ</sup>詠<sup>カ</sup>院<sup>ノ</sup>花<sup>ハ</sup>  
院<sup>ハ</sup>の兩<sup>ニ</sup>院<sup>ハ</sup>の中<sup>ハ</sup>昔<sup>キ</sup>のときさざの<sup>オホキサキニヤナノシ</sup>大<sup>オホ</sup>家<sup>カ</sup>七十<sup>ニ</sup>はあつこの朝<sup>ハ</sup>は利<sup>ナシツボノ</sup>壺<sup>ノ</sup>女<sup>ノ</sup>御<sup>ノ</sup>をりひてはあつこの朝<sup>ハ</sup>は三十<sup>ミツ</sup>菜<sup>ツ</sup>犬<sup>トシ</sup>犬<sup>トシ</sup>三<sup>サダ</sup>菜<sup>ダ</sup>の年<sup>トシ</sup>の三月<sup>ハ</sup>









年より八月廿二日より未まき相  
撲のうらりありしとあり

嵯涼院サガノリョウイン 芭マキ

うねまき相撲のうらりありしとあり  
相撲のうらりありしとあり

あが月よりありぬ云々

十一月よりありぬ云々  
十二月朔日とあり

年よりすまふ大内記書式等と  
ありぬ云々ありぬ云々

吹上フキアゲ 芭マキ

八月からの十日のほどいつり

九月朔日院のまき吹上のまきとあり  
九日の宴は吹上は源氏をひきかきとあり  
後とをひきかき院のまきとあり

れて二十余年ありとあり  
うらりありとあり  
あり二十に年よりありぬ云々

すい内院の慶とあり  
おまきとあり院の無梨とあり  
ありとありありとあり

九月つごもり 十月朔日とあり

菊宴キクノエン 芭マキ

嵯涼院芭芭

十一月朔日書式殘菊宴あり  
の宴より神事あり

うくて年より云々ありぬ云々  
とて心とあり改す云々

廿二葉

とありぬ云々 正月十八日のうらり  
ありぬ云々ありぬ云々  
二月よりありぬ云々  
十二月よりありぬ云々

ひて宴ヒテノエン 芭マキ

十月朔日書式ありひて宴あり  
ありぬ云々ありぬ云々

二月からの十日は娘の庚申とあり  
ひて宴ありありありあり

廿三葉

初秋ハツアキ 芭マキ

六月よりありぬ云々  
七月朔日とあり

八月九日相撲のうらりありぬ云々  
とありぬ云々のむすめ内侍あり

十月朔日書式ありありありあり





誰の子ともあられなきさびしき葉のむかしのとあはれぬ源氏物語の  
系譜のハ女房達家司もあはれなきさびしき葉とあはれぬと是はハ  
とひきさびしき省きぬとあはれぬと何のむかしのさびしき  
あはれなきさびしき

系圖

嵯峨院

サガノ井山 嵯峨院のこし御儀位のことさびしきあはれぬ梅花並葉はさびしき  
切りのあひままふありあひ云云はれはさびしきあはれぬの葉はては御位なり  
とれとさびしきあはれぬ 樓と葉はさびしきの院は年七十二はあはれぬとま  
あはれぬのさびしきあはれぬと又ハ水と葉ともさ  
嵯峨院は放式於てまともさびしきあはれぬとあはれぬと

式部院

大君 朱雀院の女御 初秋葉は式部院の女御とあり

中君 朱雀院の女御 初秋葉は式部院の女御とあり

中務院

後朱雀葉は先帝の御とあり中務院とあり

太皇太后 朱雀院の女御 初秋葉は式部院の女御とあり

女御

さびしきの院は女御とあり清和のこしさびしきの母の御とあり

朱雀院

朱雀院のこし御儀位のことさびしきあはれぬの院の系はさびしきあはれぬの女御とあり  
の御の御とあり 朱雀院は八月十日は朱雀院の御とあり朱雀院は  
出の御とあり 朱雀院は御とあり朱雀院の御とあり朱雀院の御とあり  
ほと可考とあり朱雀院の御とあり朱雀院の御とあり朱雀院の御とあり  
云々はさびしきあはれぬと朱雀院はハ一院とあり

式部院

右の御とあり 朱雀院はさびしきあはれぬの御とあり式部院の御とあり  
女御 朱雀院の御とあり朱雀院の御とあり朱雀院の御とあり朱雀院の御とあり

女君 桃花後序息和 女侍はありぬすし 御儀をよむ也

兵部卿 母はこれとて 此の宮に色くうをまじりて 一つははちのきり 兵部卿の御儀をよむ也  
母はおもくまきとて 母はこれとて 母はこれとて

氏部卿 母はこれとて 母はこれとて 母はこれとて

大御君 母はこれとて 母はこれとて 母はこれとて

二御君 母はこれとて 母はこれとて 母はこれとて

女君 母はこれとて 母はこれとて 母はこれとて

兵部卿 母はこれとて 母はこれとて 母はこれとて

入道 母はこれとて 母はこれとて 母はこれとて

す  
母はこれとて 母はこれとて 母はこれとて

若君 母はこれとて 母はこれとて 母はこれとて

女一宮 母はこれとて 母はこれとて 母はこれとて

女二宮 母はこれとて 母はこれとて 母はこれとて

女三宮 母はこれとて 母はこれとて 母はこれとて

女四宮 母はこれとて 母はこれとて 母はこれとて

御女 母はこれとて 母はこれとて 母はこれとて



二宮

内母御壺女御より奉りての大君 國讓をよまれりて又今生まれぬ  
あつはのこを坊にすまはるる后宮の御ひこを親王よりあひまらるるの  
二あれどひまきこごはるるあつはのこを

三宮

内母御壺女御 二の御あれどごの御心よりあつはのこを  
養育せよ内年日業よりあつはのこを

四宮

内母御壺女御 二の御あれどごの御心よりあつはのこを  
御母承香殿女御さごの院の女御の御心よりあつはのこを

五宮

御母承香殿女御さごの院の女御の御心よりあつはのこを

上野宮

よりあつはの皇子よりさごの院をよめ後承香殿よりあつはの皇子と  
あつはの皇子よりさごの院をよめ後承香殿よりあつはの皇子と  
隆寺の塔の會をよめあつはの皇子と

三妻のころと

ころとこの皇子よりいやく人の後生まれあつはの皇子の氏をあつはの皇子  
宰相より大舟よりあつはの皇子と中納言よりあつはの皇子と  
あつはの皇子のほど二町の御心よりあつはの皇子と  
あつはの皇子のほど二町の御心よりあつはの皇子と

后宮

菊宴を正月廿七日の日に奉りてあつはの皇子と  
あつはの皇子のほど二町の御心よりあつはの皇子と  
大后宮よりあつはの皇子と

承香殿女御

内母御壺女御より奉りての御心よりあつはの皇子と  
あつはの皇子のほど二町の御心よりあつはの皇子と

梅壺更衣

梅壺の御心よりあつはの皇子と  
あつはの皇子のほど二町の御心よりあつはの皇子と

祢南伎女

祢南伎の御心よりあつはの皇子と  
あつはの皇子のほど二町の御心よりあつはの皇子と

朱雀院

朱雀院の御心よりあつはの皇子と  
あつはの皇子のほど二町の御心よりあつはの皇子と

后宮

后宮の御心よりあつはの皇子と  
あつはの皇子のほど二町の御心よりあつはの皇子と

ど今上の女御女七家のことなり今一人ハミエ多ク又おぼくきよ中  
宮と云ふ

仁孝女御

左大臣源のまさゆりの大君母さうの院の女一宮 後深君は男宮臣人  
女三人の内母のより一宮又女御のより一宮今上七和十一年の  
あもあも一宮を云り 初秋は一宮の女御のより一宮 田嶋祥吉は  
一宮のち八和生あも一宮ハ去年生れあも十三年を云りハ也  
後深の女御は女御の女御と云へハ女御をりつまへへすてハ  
仁孝女御とのことナリ

成徳女御

成徳のむすめの一宮 初秋は一宮 國徳は七の事 中君の御女御  
の事なり

文和

今上

後深女御

左大臣源のまさゆりの九君母さうの院女一宮 妻良の御女御は  
二年十月十日日清幕内のことなり 成徳は一宮 後深は一宮  
まのゆりの女御大君の事なり 成徳は一宮 後深は一宮  
まのゆり又御年二十の事なり

承香女御

宣耀女御

成徳大君源のまさゆりの大君のより一宮 成徳は一宮 後深は一宮  
まのゆり又御年二十の事なり

藤原女御

右大臣藤原のまさゆりの大君 二宮の御女御 成徳は一宮 後深は一宮  
まのゆり又御年二十の事なり

梨花女御

成徳のむすめの一宮 初秋は一宮 國徳は七の事 中君の御女御  
の事なり

中務女御

まのゆりの中君母さうの院の女一宮 後深君は男宮臣人  
女三人の内母のより一宮又女御のより一宮今上七和十一年の  
あもあも一宮を云り 初秋は一宮の女御のより一宮 田嶋祥吉は  
一宮のち八和生あも一宮ハ去年生れあも十三年を云りハ也  
後深の女御は女御の女御と云へハ女御をりつまへへすてハ  
仁孝女御とのことナリ

又

ついでに女御の事 田嶋祥吉は一宮















とどろい小方 おろど七君母おろど年十位兼のうし後承元迄よる也

かろくろ小方 朱雀院の女一室母仁壽殿の女侍妻于朱雀院家

オホキオト  
太政大臣 橘 中君と元あそむ

ちろば 年三十歳まで大將うらるる大長子ありあひ年四十位兼ごうりあてうをあひ  
りいれとせよる也

女君 ヨミナキミ まるごりの小方一のむすめの子し後承元迄よる也 花実色はよく木まごの小方と  
とりの師のうしつり又太上天のこしごとのともおほいごのうしつり

女君 梅壺更衣妻于嵯峨院家 後より木まごの小方よりあひう木まごよすめあ  
られあてて河野のちをいづりの許よりあひう木まごより八歳よあへまご  
あよ由花実色よる也 おろこの君 おろこの子といしり

おとこ ちろばのいとろ子母一世孫氏 年十歳まで殿工さきをあひ後より母一室のうへの  
さうしつりより世をさきものよあひかへ法師よりあひとちをせよる也 梅花  
並座よちをいづりの親より年八歳までめあやの尊をまうりたれ十位兼小  
あまよりこりし今年二十年よりあへたること也 吹上とよまご院のいづり

よあさる 倭上座よちを僧都といしり此時年四十歳ごうりよあひあふ  
たをいづりしこと也

オホキオト  
太政大臣 橘 中君

太政大臣 小方

ちろば小方 一世孫氏 年十位兼までちろばの小方よりあひ十六歳の五月五日より  
ちをいづりしこと也 二月よりあひとちをせよる也 年二十歳を  
あひあてうをさきあふ

又 故大長子つねの小方つねをあひて母此小方とく云よりあひて  
ちろばよりあひあふこと也 年六十歳をさき  
あひとちをいづりしこと也 七年よりあひとちをいづりしこと也  
あひとちをいづりしこと也 由ほのあひとちをいづりしこと也  
あひとちをいづりしこと也 ちをいづりしこと也 ちをいづりしこと也  
あひとちをいづりしこと也 ちをいづりしこと也 ちをいづりしこと也

ちろば小方 今この内やこのうし後承元迄よる也 梅花並座よち中納言  
平のまごいづりしこと也 初秋並座よち中納言三位平朝臣よあひとちをいづりしこと也

ちろば小方 今この内やこのうし後承元迄よる也 梅花並座よち中納言  
平のまごいづりしこと也 初秋並座よち中納言三位平朝臣よあひとちをいづりしこと也

まのひききこののひきき

もとす々

大府君 梅花堂 是は太岳浦 是とすきとすり 初秋 是は平中納言との

義人

二府君 梅花堂 女師のまのひききのひきき 是は是は是は

式部丞

三府君 梅花堂 女師のまのひききのひきき 是は是は是は

大君

はのひききのま

中君

まのひききのひきき 是は是は是は 是は是は是は 是は是は是は

三君

今この梅花堂 女師 年十六 是は是は是は 是は是は是は

まのひきき 水族 水方

まのひきき 水方

又

まのひききの十二君 田徳 祥も 是は八月廿八日 是は是は是は

清原某

式部大補 大府 大納言のまのひききのまのひきき 是は是は是は

まのひきき

年十二 是は是は是は 是は是は是は 是は是は是は 是は是は是は 是は是は是は

女君

母一世 源氏 是は是は是は 是は是は是は 是は是は是は 是は是は是は 是は是は是は



ヨシミチ  
良峯某

これらにか

ゆきまさ

幼名をその后工童 父よりその素より花散りてくちりし時ありて人  
うむひとりのまぬ十葉よてありてはゆきまさの文学よりくちりて  
やうくことよきくちりて八年といふは交易の身よつてくちりてありて  
武藝をくちりて花人よりありて又左衛門尉ありて其の后とてありて  
其の琴の師つふまつるす 後永君をよきゆ 初秋よりか將ありて  
田鶴群をよき宰相中將とあり 義兵をよき大弁ゆきまさといひ  
公孫をよき三位よきまゝ けうすくまゝけうすく又良中將といひ

ヨシミチ  
ゆきまさの族小方

ヨシミチ  
良岑某小方

ゆきまさの母はくちりて

ゆきまさ小方

まきよりの十三歳をよき 田鶴群をよき八月廿八日よきありて

ありうば

後永 遣唐使参議大弁つてものくちりてありてはゆきまさの母はくちりて

すゑあ

七葉よて入學して二十歳の際より祭使をよきゆ 次上巻よすゑあといひ  
くちりてのくちりての院次よすゑあといひ 又内  
まゝと和系をよきゆ 時をよきまゝとありて方略の官をよきゆ  
さかの院をよきゆ 六十の歳より大内親よきまゝとありて  
内の后とてありて 田鶴群をよき大弁すゑあといひ 又大弁太  
か將武勲省文章博士まゝとありて内親まゝとありて 親の時  
よりくちりてありてはゆきまさの母はくちりて 又年四十歳よりありて  
といひ 公孫をよき宰相とあり三位よきまゝ けうすくといひ 貞雄  
接よきまゝといひすゑあといひの字音を陶英といひ

ありうばの族小方

ありうば小方

すゑあをよき母はくちりて

すゑあ小方

まきよりの十四歳をよき 田鶴群をよき八月廿八日よきありて

ますげ

滋野 太宰権帥年六十歳よりありて 後永君をよき 祭使をよき  
宰相とありてありてはゆきまさの母はくちりて 又年七十はまゝ

























大将 <sup>一</sup> <sup>二</sup> <sup>三</sup> <sup>四</sup> <sup>五</sup> <sup>六</sup> <sup>七</sup> <sup>八</sup> <sup>九</sup> <sup>十</sup> <sup>十一</sup> <sup>十二</sup> <sup>十三</sup> <sup>十四</sup> <sup>十五</sup> <sup>十六</sup> <sup>十七</sup> <sup>十八</sup> <sup>十九</sup> <sup>二十</sup> <sup>二十一</sup> <sup>二十二</sup> <sup>二十三</sup> <sup>二十四</sup> <sup>二十五</sup> <sup>二十六</sup> <sup>二十七</sup> <sup>二十八</sup> <sup>二十九</sup> <sup>三十</sup> <sup>三十一</sup> <sup>三十二</sup> <sup>三十三</sup> <sup>三十四</sup> <sup>三十五</sup> <sup>三十六</sup> <sup>三十七</sup> <sup>三十八</sup> <sup>三十九</sup> <sup>四十</sup> <sup>四十一</sup> <sup>四十二</sup> <sup>四十三</sup> <sup>四十四</sup> <sup>四十五</sup> <sup>四十六</sup> <sup>四十七</sup> <sup>四十八</sup> <sup>四十九</sup> <sup>五十</sup> <sup>五十一</sup> <sup>五十二</sup> <sup>五十三</sup> <sup>五十四</sup> <sup>五十五</sup> <sup>五十六</sup> <sup>五十七</sup> <sup>五十八</sup> <sup>五十九</sup> <sup>六十</sup> <sup>六十一</sup> <sup>六十二</sup> <sup>六十三</sup> <sup>六十四</sup> <sup>六十五</sup> <sup>六十六</sup> <sup>六十七</sup> <sup>六十八</sup> <sup>六十九</sup> <sup>七十</sup> <sup>七十一</sup> <sup>七十二</sup> <sup>七十三</sup> <sup>七十四</sup> <sup>七十五</sup> <sup>七十六</sup> <sup>七十七</sup> <sup>七十八</sup> <sup>七十九</sup> <sup>八十</sup> <sup>八十一</sup> <sup>八十二</sup> <sup>八十三</sup> <sup>八十四</sup> <sup>八十五</sup> <sup>八十六</sup> <sup>八十七</sup> <sup>八十八</sup> <sup>八十九</sup> <sup>九十</sup> <sup>九十一</sup> <sup>九十二</sup> <sup>九十三</sup> <sup>九十四</sup> <sup>九十五</sup> <sup>九十六</sup> <sup>九十七</sup> <sup>九十八</sup> <sup>九十九</sup> <sup>百</sup>

大将 <sup>一</sup> <sup>二</sup> <sup>三</sup> <sup>四</sup> <sup>五</sup> <sup>六</sup> <sup>七</sup> <sup>八</sup> <sup>九</sup> <sup>十</sup> <sup>十一</sup> <sup>十二</sup> <sup>十三</sup> <sup>十四</sup> <sup>十五</sup> <sup>十六</sup> <sup>十七</sup> <sup>十八</sup> <sup>十九</sup> <sup>二十</sup> <sup>二十一</sup> <sup>二十二</sup> <sup>二十三</sup> <sup>二十四</sup> <sup>二十五</sup> <sup>二十六</sup> <sup>二十七</sup> <sup>二十八</sup> <sup>二十九</sup> <sup>三十</sup> <sup>三十一</sup> <sup>三十二</sup> <sup>三十三</sup> <sup>三十四</sup> <sup>三十五</sup> <sup>三十六</sup> <sup>三十七</sup> <sup>三十八</sup> <sup>三十九</sup> <sup>四十</sup> <sup>四十一</sup> <sup>四十二</sup> <sup>四十三</sup> <sup>四十四</sup> <sup>四十五</sup> <sup>四十六</sup> <sup>四十七</sup> <sup>四十八</sup> <sup>四十九</sup> <sup>五十</sup> <sup>五十一</sup> <sup>五十二</sup> <sup>五十三</sup> <sup>五十四</sup> <sup>五十五</sup> <sup>五十六</sup> <sup>五十七</sup> <sup>五十八</sup> <sup>五十九</sup> <sup>六十</sup> <sup>六十一</sup> <sup>六十二</sup> <sup>六十三</sup> <sup>六十四</sup> <sup>六十五</sup> <sup>六十六</sup> <sup>六十七</sup> <sup>六十八</sup> <sup>六十九</sup> <sup>七十</sup> <sup>七十一</sup> <sup>七十二</sup> <sup>七十三</sup> <sup>七十四</sup> <sup>七十五</sup> <sup>七十六</sup> <sup>七十七</sup> <sup>七十八</sup> <sup>七十九</sup> <sup>八十</sup> <sup>八十一</sup> <sup>八十二</sup> <sup>八十三</sup> <sup>八十四</sup> <sup>八十五</sup> <sup>八十六</sup> <sup>八十七</sup> <sup>八十八</sup> <sup>八十九</sup> <sup>九十</sup> <sup>九十一</sup> <sup>九十二</sup> <sup>九十三</sup> <sup>九十四</sup> <sup>九十五</sup> <sup>九十六</sup> <sup>九十七</sup> <sup>九十八</sup> <sup>九十九</sup> <sup>百</sup>

















文化十二年乙亥七月免刻  
安政四年丁巳初冬補刻

皇都書林

五条橋通高倉東入

丁子屋嘉助

